

イチローと高津は仲が良いのか悪いのか

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

今年（2005年）は高津臣吾投手にとっては厄年と言えるかも知れない。昨年とはまるで天と地の差だ。

昨年シカゴ・ホワイトソックスに入団した高津は、シーズン開幕からめざましい快投を続け、クローザーだったビリー・コッチを追い抜き、その地位を簡単に手に入れてしまった。

コッチのほうは6月にチームを追い出され、フロリダ・マーリンズに移籍したが、「幸運を祈る」と高津に言い残してチームを去っていった。

「だが、それにしてもシンゴ（高津）は安く買い叩かれたな」とコッチは最後に言ったそうだが、高津の年俸約1億円に対して、コッチは約7億円だった。

コッチはたいへんな速球派で、この年の6月初めにも時速162.6キロの速球を記録している。ブルージェイズでデビュー以来4年連続30セーブ以上をあげており、アスレチックスでもクローザーとして、年間44セーブを記録している。

通算163セーブという立派な成績を残してきたコッチだが、マーリンズでも10月には戦力外に置かれることになり、今シーズンのオフには古巣のブルージェイズに年俸約1億円で復帰したものの、ここでもシーズンの開始を待たずに解雇されている。

その後消息を聞かないから、今年はおそらく不本意な浪人生活を送ったのであろう。

これほどひどくはないが、同じような運命が高津を待っているなどとは誰ひとり思わなかったのではないだろうか。

ところが、今年は、シーズン最初から徐々にのしあがってきたハーマンソンが高津を追い抜き、ついにクローザーの地位を奪ってしまった。高津はチームを追い出され、メッツのマイナー選手として再起を期することになった。

ホワイトソックスが優勝街道を独走している最中でもあり、今年から同僚になった井口の活躍も目立っていただけに、高津としてはさぞかし無念であっただろう。

幸い、シーズンの後半にはメジャーに昇格し、メッツのリリーフ投手として復調のきざしを見せていたから、来季には大いに期待できるであろう。もう一度あのさっそうたる守護神ぶりを見せてもらいたいものである。

☆ ☆ ☆

その高津が最も光り輝いていた昨年（2004年）の9月3日、イチローとの初めてのメジャー対決が、シカゴ・ホワイトソックスの本拠地 US セルラー球場で実現した。試合後、それぞれ別の場所でインタビューが行われたが、このとき収録された二人の談話には微妙な違いがあって面白い。

野球という勝負の世界では、尊敬感情と敵対意識とは別のものだということがよく判るのである。野球を真に愛する者どうしは、お互いを或る種の匂いで感じ取り、お互いを認め合う。これが求道者どうしの尊敬感情と言えるものであろう。

何の匂いだろうか。おそらくは自己修練の匂いであろう。彼らがそれぞれの頂点を目指し、自己を磨き上げ、努力を積み重ねている姿に惚れ込むのであって、その結果がどうだからというわけではない。

シスラーやタイ・カップが尊敬されるのは、彼らが記録の保持者だからということではなく、彼らとその記録を目標にして努力した人間だからである。

結果として記録された数値が重要なのではなく、それに至ったプロセスが重要だということになる。したがって、求道者どうしの尊敬というのは、お互いの生き方に対する尊敬だと言うことができよう。

お互いにこういう尊敬感情を抱き合っていることを「仲が良い」と形容してもよいならば、高津とイチローは、まずは仲が良い部類に入ると言えよう。

しかし、ピッチャーと打者の間には、対戦相手としてのライバル意識、宿命的な敵対感情がないとは言えない。味方チームのピッチャーと打者の間にさえ、或る種の対抗意識があるとさえ言われている。

高津とイチローの間にも、このような対立意識があるのだとすれば、彼らはむしろ仲が悪いということになるであろう。

この年メジャーリーグ入りし、最初は中継ぎ投手として出発したが、6月からクローザーの地位を獲得した高津に対して、イチローも決して尊敬の感情を欠いてはいない。

「クローザーの座を途中から手に入れるというのは簡単なことではないと思う。投手のことはよく分からないけれど、すごいことだと思います」と記者団にも語っていた。

そして、高津とのメジャー初対決となったこの日、9回表無死一、二塁のチャンスで打席に立ったイチローは、高津にセンター・フライに討ち取られ、まずは一本取られた形になった。

高津はこのあと、後続の反撃を一点に抑えて、ホワイトソックスの2点リードを守り抜いたのである。試合後別々に行われたインタビューで、二人の間には感情的なすれ違いが見られた。

高津が真っ先に思い出したのは、9年前の日本シリーズでの真剣勝負だった。「それまで抑えられなかったイチロー君を研究して研究して、やっと何とかという形にまで出来たことですね。今日はその時の配球に似ていたかも知れない」と、いくぶんこの日の結果に満足げである。

これとは対照的に、イチローが思い出したのは、8年前のオールスターでのおふぎけ的一幕だっ

た。「だって、オールスターでピッチャーですよ」とイチローが言うように、彼が投手としてマウンドに立ち、高津が代打として打席に立った、祝宴でのお座興のことだった。

二人へのインタビューが別々に行われたので、話が平行線で進んでいき、それが二人の性格の違いを示すようではなかなか面白いのだが、高津は次のように続ける。

「チームがよくない時に個人成績を上げるのは大変なこと。あの状況で先頭を切って勝利のためにヒット。野球選手として尊敬している」と。

イチローは言う。「こちらでは、弱肉強食。そう言ってもらえるのは有り難いが、僕は大変とは思っていません。今度は、一転して、イチローのほうが真剣になってくる。

「弱肉強食」という言葉は、彼と高津の間にも、戦う相手という関係しかないということであろう。この日、最後の回に打ち取られた悔しさが、今になって込み上げてきたのかも知れない。3回に放った二塁打も、決して「勝利のためのヒット」とは言えなかった。

次の機会には、自分のほうが打ち込んで、仕返ししなければならない。こういう勝負の世界に置かれた二人なのだというのが、イチローの言いたいことなのであろう。

しかし、敵対関係と尊敬の念は別のものである。イチローがメジャーでの初打席いらい苦手になっている、アスレチックスのティム・ハドソン投手（現在ブレーブス）について、「嫌だけど、すごく楽しい相手」と言うのは、そういうアンビバレントな感情を言っているのであろう。敵対関係が強くなればなるほど尊敬感情も高まるといった関係である。

ハドソンを打ち込んだ日のイチローは、「感想は別にありません」と言って、言葉少なに引き上げてしまうことが常だが、一方、優位に立っているはずのハドソンが「彼はすごい、そうとしか言いようがない」とイチローを称えるところに、二人の関係が見えてくるような気がする。

野球にひたむきに取り組む姿に共感するということでは、敵も味方もないのである。

この場合、勝負を超えたところで尊敬感情が生まれる。チームの成績に貢献したとか、個人の成績を上げたということは、日々の努力の結果としてたまたま出てくることで、尊敬されてよいのは、その、日々の努力のほうである。

どんな状況にあっても、一打席一打席に専念することしかない、結果はそれに自然に付いてくるものだと考えるイチローにとって、自分が個人成績を上げることを目的に頑張っていると思われたくはなかったのであろう。

とあって、彼が結果をまったく無視しているというわけではなく、野球を人々に見せるショーマンとして、ファンに楽しんでもらいたいという気持ちを忘れてはいない。

8月中頃から、人々がチームの勝敗よりも彼の個人記録ばかりを期待する傾向になっていることについては、「もう見る人の楽しみは個人にしかない。できる限り楽しませたい」と言っている。

高津がクローザーに昇格した時には称賛を惜しまなかったイチローのことを考えるならば、自分の道を求め、人間を作るために努力する者どうしとして、時には味方となり、時には敵となるが、

互いに尊敬し合う感情は育てていきたいというのが、彼の高津に対するメッセージと理解してもよ
いだろう。

[2004/12/24 biwaco]